

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月7日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03047

研究課題名(和文)江戸時代における女性更年期障害の医療と言説

研究課題名(英文)Medical treatment and discourse of menopausal disorders in the Edo period

## 研究代表者

鈴木 則子(Suzuki, Noriko)

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：20335475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代の医学も中国医学も、中高年女性の不定愁訴に対する知見や臨床例を、女性特有の病気としては記載しないことが確認できた。また一般の人々を対象にして書かれた養生書も、医学書同様に、女性の疾病として特別に論じられるのは、「血の道」というカテゴリーで生理不順を論じるにとどまる。いっぽう売薬関係の史料では、女性の多様な不定愁訴に対応する薬が多く存在し、またそれに関する宣伝も多彩に展開していることが分かった。つまり、江戸時代において中高年女性の不定愁訴は医学の対象として特化されなかったが、売薬によるセルフメディケーションの対象として売薬業者のひとつの重要なマーケットであったことが確認できた。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢化社会を迎える現代、更年期障害治療は医学の大きな課題の一つと社会的にもみなされてきている。これに関連したトピックが新聞や雑誌に頻繁に取り上げられるようになって、人文社会科学系も巻き込んで、様々な研究成果が発信されているが、前近代の日本史学からのアプローチはまだなされていなかった。

本研究は現代社会の状況の前提として、江戸時代の中高年女性の病と治療の実態を史料に即して明らかにすることを通じて、女性特有の病気である血の道という病の認識が、医学よりも売薬業の市場原理の中で拡散されていったことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：It was confirmed that neither medicine in Edo period nor Chinese medicine described knowledge or clinical cases for unfixed complaints of middle-aged women as women's specific diseases. In addition, as with medical textbooks, those written specifically for the general public, which are specifically discussed as women's diseases, only discuss menstrual irregularities in the category of "the way of blood."

On the other hand, it was found that there are many medicines for dealing with various unfixed complaints among women in the sales agent-related materials, and there is also a wide spread of publicity related to them. In other words, it was confirmed that although the unfixed complaints of middle-aged and elderly women were not specialized as medical subjects in the Edo period, they were one important market of the drug dealers as a target of self-medication with sales drugs.

研究分野：日本近世史

キーワード：更年期障害

## 1. 研究開始当初の背景

近年、医学や衛生学・看護学・薬学領域だけでなく、心理学や社会学の領域においても、更年期障害を中心とする婦人病の研究は、女性の QOL (quality of life、生活の質) 向上を目的に、製薬業界の積極的な後押しもあって大きな進展をみせている。

これらの研究が明らかにしているのは、更年期障害はホルモンバランスの乱れに起因する疾病だが、女性をとりまく環境が個々の発症形態に複雑に影響を及ぼしているという事実である。医療人類学のマーガレット・ロック『更年期』(みすず書房、2005年)は、カナダと日本女性に対して大規模な聞き取り調査を行い、女性ホルモンの減少という生理的背景を同じくするはずの更年期障害の主症状が、両国で大きく異なることを明らかにした。ロックはその原因を、両国の女性をとりまく文化や社会のあり方、ことに女性の老いに対する意識の相違に求めている。

となると、更年期障害に関する歴史研究は、女性をめぐる社会史研究のために有効な手段であると思われるが、これまで日本の前近代史で中高年女性の病に関する研究はほとんどされてこなかった。女性と病・医療に関する研究は、ほぼ出産史領域に限定されている。その背景には、女性身体は産む性としてのみ社会から注目されてきたという歴史的な経緯、出産・月経の「血穢」が女性の社会的周縁化をもたらしたキーワードとして、民俗学領域も含めて研究対象として着目されてきたことなどがあげられよう。

だが、もちろん江戸時代の中高年女性が医療や薬から疎外されていたわけではない。そこで本研究は、江戸時代の史料の中に登場する中高年女性の疾病と治療の事例を収集することを通じて、彼女たちの社会的な位相を明らかにすることを目指した。

## 2. 研究の目的

高齢化社会を迎える現代、更年期障害治療は医学の大きな課題の一つと社会的にもみなされてきている。これに関連したトピックが、新聞や雑誌に頻繁に取り上げられるようになった。上記のように人文社会科学系も巻き込んで、様々な研究成果が発信されている。が、歴史学からのアプローチはまだなされておらず、本研究によって日本社会が歴史的に形成してきた閉経後の女性身体観と江戸時代の更年期障害の実態が明らかになれば、日本社会に即した更年期障害の理解や対処法の解明に貢献できると考えた。

また従来、女性身体の特性を出産や血穢から捉える研究がなされてきたが、それは女性のライフサイクルと身体性のすべてをカバーするものではない。本研究を通じて出産を終えた女性身体、血穢から解放された女性身体の医学的・社会的な位置づけを明らかにすることによって、女性の人生・身体の研究を包括的なものにしたいたいと考えた。

## 3. 研究の方法

- (1) 近世医学書の「婦人門」「婦人科」の「経閉」にまつわる諸病(更年期障害)の記載と、治療録・診療録に載る女性患者の訴え・医者への処置に関する記録を収集・分析する。
- (2) 上記について、中国医書の記述を対象に収集・分析する。
- (3) 養生書・売薬史料などから、医書で更年期の疾病に分類され、治療の対象とされた中高年女性の症状に関する史料を収集・分析する。

## 4. 研究成果

当初研究は、江戸時代に多く読まれた中国医書と江戸時代に執筆された日本医学書のなかの婦人門を中心に、中高年女性の疾病に関する史料を収集する作業を行った。

対象とした日本医学書の主たるものは、近世漢方医学書集成所収書、京都大学富士川文庫収蔵書・杏雨書屋収蔵書・東北大学狩野文庫収蔵書である。中国医書については、和刻漢籍医書集成所収書を中心に、京都大学富士川文化収蔵書についておこなった。

しかしながらこの作業過程でわかったことは、医学は出産や生理不順に関する病気以外は、基本的には男性と女性の疾病を特別に区別することなく治療しているという状況である。つまり、江戸時代の医学も中国医学も、中高年女性の不定愁訴に対する知見や臨床例を、女性特有の病気としては一切記載しないのである。

ついで、一般の人々を対象にして書かれた養生書のなかに女性の病気や身体がどのように述べられているのかを調査した。

調査対象としたのは日本衛生文庫や日本教育文庫所収の一般向け養生書と、江戸時代女性文庫に所収された『婦人寿草』などの女性向けに書かれた養生書、京都大学富士川文庫所蔵の戯作者による健康読本である。

これらの養生書群においても、医学書同様に、女性固有の疾病として論じられるのは生理不順の問題であって、やはり妊娠・出産が主たる課題として意識されていた。

そこで、史料収集の対象を当初の研究計画段階では考えていなかった、売薬関係史料に移し、いわゆる血の道薬というカテゴリーで調査を行った。

対象としたのは各地の薬学系博物館に保管されている薬の引き札やそれら博物館の図録類、また京都や江戸の「独案内」と呼ばれる買い物案内書に記載された薬の宣伝などである。さらに、地方の医家史料（例えば備前中島家文書など）の中にも含まれる、医者による売薬台帳も調査対象とした。

これらの調査を通じて、女性の多様な不定愁訴に対応する売薬が多く存在し、またそれに関する宣伝も多彩に展開していたことが分かった。ことに医家史料においては、たとえば女性産科医光後玉江などが販売した薬があげられる。これらの婦人薬の治療対象は、妊娠可能年齢の女性から閉経後の女性まで含みこむ。

このようにみていくと、江戸時代において中高年女性の不定愁訴は医学の対象として特化されることはなかったが、売薬によるセルフメディケーションの対象としては、売薬業者や産科医のひとつの重要なマーケットであったことが確認できた。

江戸時代の庶民医療において、医者による治療と売薬によるセルフメディケーションの比重は明確ではない。が、都市でも農村でも後者の比重がかなり大きかったことはつとに指摘されてきた。また、今回の調査の過程で、開業医が診療とは別に売薬業を手広く行うことが珍しくなく、そのときの主たる販売薬に婦人薬が多いこともわかった。今後の課題として売薬史料から女性の病気の諸相をさらに詳細に検討していく必要があることが確認された。

また、婦人病の史料を収集する過程で、思いがけず、女性医療従事者に関する史料を色々と収集することができた。彼女たちの標榜科は産婦人科に限定されず、本道（内科）眼科、鍼灸科、按摩、小児科など多岐にわたる。女性医療従事者の施術対象は女性とは限らないが、江戸時代の女性がおかれた医療環境を考えるための一つの重要な切り口として、今後女性医療従事者についても調査を進めていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

(1) 鈴木則子「江戸時代後期における産科医療環境の変容とその特質」、歴史学フォーラム 2017 の記録「書物と学問から時代を超える」、査読なし、2017 年度号、2018 年、14-22 頁

(2) 鈴木則子『Developments in Early Modern Balneotherapy in Japan and the Transformation of Hot-Spring Cures』、ACTA ASIATICA、査読なし、115 号、2018 年、1 - 23 頁

(3) 鈴木則子「須佐之男命厄神退治之図」(葛飾北斎画)に描かれた病」、浮世絵芸術、査読有、175 号、2018 年、5 - 15 頁

(4) 鈴木則子「江戸時代の女医」、洋学史通信、査読なし、29 号、2017 年、5-6 頁

(5) 鈴木則子「近世後期産科医療の展開と女性～賀川流産科をめぐる」アジア・ジェンダー文化研究、査読有、1 号、2017 年、5-17 頁

(6) 鈴木則子「江戸時代の城崎湯治」、まほら、査読なし、89 号、38-39 頁、2016 年

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 鈴木則子「江戸時代における大坂の女医」、第 119 回日本医史学会総会・学術大会、2018 年

(2) 鈴木則子「近世賀川流産科教育における医書の位置づけ」、シンポジウム「書物・出版と社会変容」、2017 年

(3) 鈴木則子「江戸時代後期における産科医療環境の変容とその特質」、歴史学フォーラム 2017、2017 年

(4) 鈴木則子「日本近世温泉医学の展開と湯治の変容」、第 62 回国際東方学会議、2017 年

(5) 鈴木則子「江戸後期産科医療の展開と女性～賀川流回生術をめぐる」、女性史総合研究会例会、2016 年

〔図書〕(計 2 件)

(1) 奈良女子大学生生活文化化学研究会編、敬文舎、『ジェンダーで問い直す暮らしと文化』2019 年、総頁数 351 頁、執筆箇所 57 - 79 頁

(2)京都部落問題研究資料センター編、京都部落問題研究資料センター発行、『2016 年度部落史  
連続講座講演録』2017 年、総頁数 142 頁、執筆箇所 37 - 53 頁